

111. ^{99m}Tc -フチン酸による肝カメラ像における欠損像の検討

放射線医学総合研究所 臨床研究部

有水 昇

〔目的〕 ^{99m}Tc による肝カメラ像では、欠損像または局所的な放射能の減少が必ずしも肝内の Space Occupied Lesions でない場合にしばしば直面する。本研究の目的は、このような場合について検討を行うに診断に資することである。

〔方法および結果〕

装置としては、東芝製大型シンチカメラ (15・1/4 インチ直径 NaI 結晶付) に42000孔の高解像力コリメータを取付けて使用した。

カメラ像では感度の不均等性により偽欠損像が出現する。感度の不均等性の影響を減し偽欠損像を見誤まらないようにするために、背臥位で頭→足、足→頭の2方向についてシンチグラムを施行した。

胆管閉塞などによる胆管拡張の場合には、しばしば欠損像が肝門部以外にも出現し、Space Occupied Lesions と判読され易い。このような胆管拡張像が出現し易いのはカメラ像の解像力の向上により拡張部が描写されるためと思われる。また ^{99m}Tc -フチン酸と ^{131}I -ローズベンガルとによる2核種のサブトラクションシンチグラムを行うと、胆汁のうっ滞した胆管像の得られる場合がある。

112. 肝癌と肝シンチグラム (剖検例を中心として)

大阪赤十字病院 内科

但馬 浩 早稲田則雄 清水 達夫

中嶋 健一

病理部

佐々木正道

関西医科大学 放射線科

笠原 明

我々の病院の最近5年間における全剖検数は426例であり、その中で原発性肝癌は48例(11.0%)、転移性肝癌は73例(17.1%)であった。

この肝癌症例の中で、この3年間に肝シンチグラフィーを行ったのは原発性肝癌25例、転移性肝癌20例であった。これらの症例を検討し次のような結果を得た。

肝シンチグラムでSOLを認めたものは、原発性肝癌で25例中21例(84%)であり、転移性肝癌では20例中13例(65%)であった。ただし後者の中で、肝シンチ施行と死亡の間が6ヶ月ある2例を除くと18例中13例(72%)であった。なお転移性肝癌でSOLの検出率の悪いのは、小さい転移の存在の故であった。

SOLの単数のものは、原発性肝癌で21例中18例(86%)、複数のものは3例(16%)であり、転移性肝癌では、単数のもの13例中6例(16%)であり、複数のものは7例(54%)であった。従ってSOLの数によって、原発性か転移性かを分ける事は困難であるが、原発性肝癌では単数のものが多い事は確かである。

AFPの陽性例は、原発性肝癌では41例中28例(68%)、転移性肝癌では18例中2例(11%)であった。AFPは肝癌の原発性か、転移性かの鑑別に大いに役立つものと思われる。

肝シンチグラフィーを施行した25例の原発性肝癌の内、肝硬変に伴ったものは21例(84%)であり、Z型肝硬変に伴ったものがその過半数を占めた。肝硬変を伴わないものは、胆管癌の3例と肝線維化を伴った1例であった。従って原発性肝癌はその大半が肝硬変の上に発生するものと思われる。